

トラック横転

危険度表示

北海道トラック協会（札幌市）などはトラックやトレーラーが横転する事故を防ぐと、車体の重心を検知するシステムの実証実験を始めた。トラック1台に車体の揺れなどを計測する装置を取り付け、3月末まで行う。長期間、公道でシステムの効果を検証するのは全国初の試みという。



システムの仕組みを説明する渡辺教授（18日、北海道トラック協会で）

助手席に端末 重心検知、公道で検証

●トラックの横転事故を防ぐシステムの概要
※写真は渡辺教授提供
助手席のタブレット端末



国土交通省北海道運輸局によると、道内の運送事業者のトラック・トレーラーが横転した事故は2010～14年に計34件発生。事故による死者は1人、重軽傷者は20人で、運転手の不適切な運転操作が原因となったのが大半だという。

システムを開発したのは、東京海洋大の渡辺豊教授（コンテナ輸送工学）。車体の揺れやカーブの際にかかる遠心力を計測する装置をトラックに設置。重心の位置などを割り出し、助手席に置いたタブレット端末の画面に横転の危険度が表示される仕組みだ。

危険度は速度計のよう

に0～100%で示され、100%に達すると横転する。80%でもハンドルを急に切ったり、急ブレーキをかけたたりすると横転の恐れがある。運転手は走行中にタブレット端末の画面を見て、危険度が高まった際に

が実証できればシステムの有効性が世界的にも認められるため、北海道を実験場所として選んだという。積み荷がコンテナの場合でも効果を発揮するのが特徴だ。運送会社はコンテナを開けて荷主に汚れや傷が付くと荷主から損害賠償を求められる可能性があるため、コンテナ内の荷物の片寄りを確認できないケースがほとんど。このシステムではコンテナ内部が分からなくても横転の危険度を把握

できるという。該社は2月10日に運送会社「栗林海陸輸送」（苫小牧市）の協力会社である北広島輸送（北広島市）の車両に設置された。同社取締役で車両のハンドルを握る江口勝司さん（42）は「横転の危険度がわかりやすく、運転経験の浅い運転手にも役立つ。コンテナ内部が分からないという不安も減らせる」と話す。北海道トラック協会では「システムが安全性を高めるきっかけに

なれば」と期待している。18日には札幌市内でシステムの検討会が開かれ、運送会社から「運転手がタブレット端末の画面に集中しすぎる」と危ない。危険度を音声で知らせてくれる方がよい」などの意見も出た。渡辺教授は「実験期間中に音声を改良する。トラックだけではなく長距離バスなどの公共交通機関にも適用できるように進化させている」と話している。